二〇二六年度（令和８年度）

横浜女学院中学校　A入学試験問題

令和８年２月１日（午前）

国　語

注　意

1　指示があるまで開けないでください。
2　問題は、23ページあります。
3　解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4　時間は50分です。

受験番号	氏　名

一　次の文章の――線①～④のカタカナを漢字に、漢字をひらがなにしなさい。また、文章中の漢字の間違(まちが)いを1か所ぬき出し、正しい漢字に直しなさい。

日本の食料自給率は先進国の中でも低い水準にある。その理由として、日本人の食生活の変化や海外からの食物輸入量の①ゾウカが挙げられる。特に小麦やトウモロコシなどの②コクモツの輸入量が多い。食料自給率高上のためには国産の食材消費を積極的に進めていくことや農業を活性化することが求められている。近年では、農産物をブランド化して③シュッカし、④付加価値を創造する取り組みも行われている。

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（字数制限のある問いは、句読点や記号も1字に数えます。）

みなさんの身のまわりを見回してみましょう。そこには自然があり、それ以上に人工物があることでしょう。また、川の水が汚い、近所の木が切られた、工事の音がうるさい、といった問題が生じているかもしれません。実は、今挙げたことが、みなさんや私が普通に暮らしていて実感できる環境問題です。私たちの暮らしに影響のある環境問題です。そしてその舞台は多くの場合、「都市」であることに気がつくことでしょう（ここでは「都市」を、第一次産業で生計を立てていない人々が多く暮らす地域と定義します。したがって渋谷とか新宿のような大都市だけではなく、地方中小都市のような「まち」を広く含みます）。

環境を自然環境と捉えることの問題①の一つは、農村・漁村を良い環境と見なし、都市環境を悪者にしてしまうことにあります。もちろん、農村・漁村を良い環境のモデルにしたいという主張はよく分かります。自分たちが生きていくために食べ物を生産する土地とともに生きる、というのは真っ当な話です。しかしそこから、農村・漁村に住んでいる人々は自然に近い生き方をしていて正しい、都市に住んでいる人は自然に反する間違った暮らしをしている、と評価するのは、いかがなものでしょうか（直接そう言う人はいませんが、そういう評価を前提として話をする人はときどきいます）。

現在、世界人口の半分以上は都市に暮らしています。先の見方②からすると、世界人口の半分以上は間違った暮らし方をしていることになります。それはあまりにも救いのない話ではないでしょうか。A、都市で暮らすことは悪いことなのでしょうか。

以下では、（1）都市は地球の持続可能性に貢献（こうけん）できるということ、（2）都市のなかで自然に接することができること、（3）都市は人が幸せに暮らせる地域であること、を順に確認していきたいと思います。

先ほど、都市は地球の持続可能性に貢献できると言いました。みなさんのなかには不思議に思った人もいるかと思います。都市は大量の資源・エネルギーを消費する、地球にやさしくない地域ではないのですか、と。しかし、都市は資源・エネルギーが節約できる場所なのです。ポイントになるのは「集住」と「公共交通の利用」です。

（中略）

それでは、多くの人が都市から脱出し、郊外（こうがい）※1の戸建て住宅に住んだ場合、どうなるでしょうか。おそらくほとんどの人がエアコンを設置し、移動のためにクルマを使うことでしょう。一般論（いっぱん）として、戸建て住宅でエアコンをきかせ、クルマで外出する生活は、エネルギー浪費（ろうひ）型の生活であり、マイカーでの移動を減らすことや、エアコンを使わずに生活をすることが、地球の持続可能性に貢献する道となります。

しかし今や、郊外に住む人にクルマの使用を禁ずることや、真夏にエアコンを使わずに生活しなさいと命じることは不可能です。③それは生活や生命を脅（おびや）かすことになります。そのような禁止命令を「環境倫理（りんり）※2」と捉えてはいけません。むしろ個人がエネルギーを浪費しないライフスタイルをもてるように、社会的なしくみをつくっていくのが環境倫理の考え方です。

では、④個人がエネルギーを浪費しないライフスタイルをもてるように社会は何ができるでしょうか。一つは、「集合住宅」

に簡単に住めるようにすることです。集合住宅といっても、タワーマンションのような規模ではなく、中規模のアパートやテラスハウス（昔は長屋といいました）を考えてみましょう。中規模のアパートやテラスハウスに住むと、外気にふれる表面積が小さくなるので、戸建て住宅に住むよりもエアコンの利用が効率的になります。効率的な熱利用や通風などが工夫された集合住宅であれば、なお良いでしょう。

「集住」と並ぶ都市の利点は、「公共交通の利用」にあります。先ほど述べたように、つねにクルマで移動する生活は、膨大な量のガソリンを消費する、持続不可能なライフスタイルです。それに対して、皆がバスや電車で移動すれば、エネルギーの節約になります。また都市の利点は、徒歩圏内にいろいろな店があるということです。それらによって、都市に住む人はクルマを持つ必要がなくなります。

以上から、都市に効率的な集合住宅と公共交通を整備することによって、都市は地球の持続可能性に貢献できる、ということができます。このことによって、都市住民は特別なことをしなくても、郊外の住民よりも地球にやさしい生活をすることが可能になるのです。

このように都市生活の利点を強調すると、従来の自然保護運動家や自然愛好家から「でも都市では自然と接することができないではないか」と言われるかもしれません。実際のところ、都市を、「自然がない地域」として、コンクリートやアスファルト、ビルやマンションに囲まれた人工的な地域として、思い描く人も多いでしょう。

しかし、「都市に自然がない」というのは間違いです。都市には緑地や公園が整備されていることが多いですし、昔ながらの川や雑木林が残っているところもあります。カラスもいればセミもいます。それなのに、「都市には自然がない」と断

言する人は、都市にある自然を無視しているといえるでしょう。「都市には自然がない」という言葉が広まると、都市にある自然はどんどん見逃されていくことでしょう。そして身近な自然がなくなっても気づかれない、あるいは関心を持たれない、ということになるでしょう。「都市に自然はない」という断言は、都市に今ある自然を失わせる方向にしか作用しないと思います。

また、都市に自然がないことを問題視する人たちは、子どもを自然に触れさせようと言って、いわゆる「田舎」に連れていって「自然体験」をさせようとします。これだと、都市に住んでいる人々は、他の地域に行かないと自然に触れられないということになります。しかし、先ほど述べたように、都市にも自然があります。⑤足もとにある自然に鈍感になって、他の地域で与えられた自然を体験するというのは、何か奇妙なことのように思います。

みなさんのなかには、小さいときに「秘密基地」をつくって遊んだことがある人もいると思います。私は授業の課題として、大学生に子どもの頃の秘密基地体験についてのレポートを書いてもらっています。多くの人が当時の体験を思い出して楽しんで書いてくれます。

秘密基地には何らかの形で「B」が絡んでいます。神社の茂み、林の中、橋の下、公園の隅などは、秘密基地の格好の場所です。草でアーチ状の屋根を作ったり、土を掘ったり、石ころやどんぐりをそこに隠したり、といったことがなされます。これらの体験は、都市において自然に触れる体験、つまり「自然体験」といってよいでしょう。この種の体験を見ずに、プログラムされた田舎への旅行を「自然体験」と見なすのは、変な感じがします。

最後に、特に大都市に関してですが、「こんなところは本来、人の住む場所ではない」という不満の声を聞くことがあり

ます。大都市はごみごみしていて、人間にとってストレスの多い場所ではないのか。エネルギー効率が良いからといって、そのようなストレスを我慢（がまん）して都市に暮らすべきだというのか、と。

このような問いに対しては、すべての都市がストレスフルなわけではないし、ストレスをためるのはその人の生活の仕方、働き方、人間関係によるところが大きいだろうと答えます。都市はストレスフルだから田舎で暮らそう、というのではなく、都市を快適にすることを考えたほうがよいのではないでしょうか。

快適な都市生活を満喫（まんきつ）できれば、田舎に逃避（とうひ）しなくても済むはずです。都市が快適になれば、その副産物として、郊外の自然保護につながる可能性があります。皆が都市に住むようになれば、郊外の住宅開発をする必要がなくなるからです。

また、都市の魅力（みりょく）を発見することは、観光の考え方を変えることにつながります。都市に退屈（たいくつ）した人々は、郊外の観光地に足を運びます。その結果、特に世界自然遺産などには人々が殺到（さっとう）し、現地の自然を破壊したりゴミを散らかしたりする「オーバーユース問題」を引き起こします。しかし、近場にある魅力的な場所を訪れることも立派な「観光」です。それぞれが近所の観光を楽しむようになれば、オーバーユース問題の解消につながるでしょう。

（吉永明弘『はじめて学ぶ環境倫理―未来のためにしくみを問う』より）

※1　郊外…都市の近くの地域。近郊。町はずれ。

※2　倫理…社会生活で人の守るべき道理。

問一　A（13行目）にあてはまる言葉として最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア　また　　イ　そこで　　ウ　しかし　　エ　そもそも　　オ　そのうえ

問二　――線①「問題」（7行目）の本文中での意味と同じ意味で用いられているものとして最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア　問題の解き方を先生に質問するために職員室へ行く。

イ　幸福とは何かという問題は、常に議論され続けてきた。

ウ　彼は人々に注目されている、問題の芸能人だ。

エ　今回のテストの問題はとても難しかった。

オ　そのプロジェクトには、大きな問題がある。

問三　――線②「先の見方」（12行目）とはどのような見方ですか。本文中の言葉を用いて60字以内で答えなさい。

問四　――線③「それ」（26行目）が指示する内容を本文より探し、最初と最後の5字ずつをぬき出しなさい。

問五　――線④「個人がエネルギーを浪費しないライフスタイルをもてるように社会は何ができるでしょうか」（29行目）に対する答えは何だと筆者は述べていますか。本文より23字でぬき出しなさい。

問六　――線⑤「足もとにある自然」（52行目）の具体例を示したひと続きの2文を探し、最初の5字を答えなさい。

問七　B（57行目）にあてはまる言葉を本文より2字でぬき出しなさい。

問八　本文の内容に合うものとして最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア　私たちの身のまわりには自然だけでなく人工物も多くあるため、木が切られる、工事の音がうるさいなど人工物に対する環境問題が大きく取り上げられている。

イ　アパートやテラスハウスのような集合住宅では、外気にふれる表面積が小さくなるため、戸建て住宅に住むよりもエアコンの利用が効率的になると考えられる。

ウ　都市では、資源・エネルギーが浪費されているからこそ、その対策に費用をかけることでエネルギーを節約し、地球の持続可能性に貢献することができる。

エ　子どもを自然に触れさせようとするならば、他の地域に自然体験として行くよりも、近所の公園で秘密基地をつくるほうが手軽で子どもにとっても楽しい思い出となる。

オ　オーバーユースの問題を解決するためには都市観光に対する考え方を変える必要があるので、郊外の自然を保護したり自然の魅力を発信したりすることが大切である。

三　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（字数制限のある問いは、句読点や記号も1字に数えます。）

「奪えない　この青い春　何人も」

クラスのみんなが黒板に注目するなか、ひとり他人ごとのように窓の外を眺めていた音々の耳に「五・七・五」のリズムがまるで歌のように届く。

日本語のはずなのに、たった十七音のはずなのに、それは外国の歌のように聞こえた。

「奪えない　この青い春　何人も」

もう一度、歌われ、いや、読みあげられてやっと音々はそれが、自分が書いた「スローガン」だと気づく。

顔を九十度方向転換。音々の両目は、外の空から、教室の黒板を捉えた。

①春の空の青さと、教室の黒板の緑は、その距離も明るさもあまりにも違いすぎて、焦点がすぐに合わない。音々は、まぶたをパチパチと二、三回またたかせた。

音々の視界の解像度があがっていく。

【奪えない　この青い春　何人も】

黒板の中央には、チョークで書いたとはとても思えない綺麗な字で、そう書かれていた。【何人も】の下には【正】の字がたくさん並んでいる。

「それでは、二年二組のスローガンは『奪えない　この青い春　何人も』に決定します」

学級委員として教壇に立っている天神至くんが、高らかに宣言した。

窓際の席に座る音々は口を大きく開け、ぽかんとしてしまう。どうしてこんなことに、と頭を抱えたくなった。そうだ、そもそものはじまりは、校長先生のせいだった。

音々の通う中学校では、五月に体育祭が開催される。いろいろな準備が並行して進められるなか、連休を前に、校長先生からある「お題」が出された。

――クラスを一致団結させる「スローガン」をみなさんで考えてください。

体育祭は、学年混合で赤組、青組、白組に分かれて開催されるのだからクラス単位の団結なんて関係ないのでは、と先生たちも含めて誰もが首をかしげたが、マイペースな校長先生はみんなの反応など気にしないようだ。

――もし進むべき道に迷ったら、面白いほうへ、が私のモットーです。

毎度全校朝礼でそう宣言する変わり者の校長先生は、厄介なことに、やると決めたらすぐやる行動力と決断力を持ったひとだった。

結局、連休明けに各クラスで体育祭に向けたスローガンを決め、垂れ幕にして教室の窓から吊るすことになってしまった。

今日のＬＨＲは、そのスローガン決めが主な議題。

スローガンなんてどうでもいい、と思ったが、ひとり一案は考えるのが絶対ということで、音々も参加せざるを得なかった。

しぶしぶ一案だけ考えて提出した。その後すべてのスローガンの中から自分がよいと思ったものを選んで紙に書き、二つ折りにして、投票箱にイン。

なんだか選挙みたいだ。まだ選挙権もないくせに、音々はそんな感想を抱いていた。

正直なところ、②自分の案が選ばれることなどないと思っていた。クラスの中でいちばん「一致団結」という四字熟語に遠い存在が自分だという自負が音々にはあった。

なのに。なのに、だ。実際には音々の案が選ばれてしまった。途端に嫌な予感が［A］と湧き上がる。

「これ考えたの、誰だよ～！」

予感的中。クラスでいちばん声の大きい鹿沼朋希くんが、いつも以上に大声で、教室中に質問を投げかける。

「え～、あたしじゃないよ～」

「オレでもねーし」

「そりゃ、そうでしょうね」

「どういう意味だよ！」

「ふっふっふっ、みんなやっと俺の文才に気づいたようだね」

「やかましい！　座っとけ。毎回漢字の小テスト十点のくせに」

鹿沼くんの一声をきっかけに、一気にざわつくクラス。みなが発案者という名の「犯人」探しに夢中。お互いに顔を見ては、「おまえじゃないの？」と言い合っている。

こうなることは予想できた。うちのクラスはいい意味でも悪い意味でも常にテンションが高い。それが音々は苦手だったし、いちばん巻き込まれたくない「ノリ」だった。

音々は、クラス中を交差している視線に交わらないように、机に突っ伏した。

「あれ、どうしたの松尾さん？」

「気分でも悪いの？」

みんなと違う行動をとったことが裏目に出てしまった。余計に注目を浴びる結果に。

「もしかして、これ、松尾が考えたんじゃね？」

再び鹿沼くんの大声が教室中を震わせる。ついでに、音々の心臓も震える。普段無神経そうなキャラなのに、どうしてこういうところは鋭いんだ。

音々は自分の頭頂部に、肩に、背中に、クラス中の視線が集まっているのを感じた。

まるで虫眼鏡で光を一点に集められているかのように、クラスメートの刺すような視線は、熱を帯び、いまにも B と煙を出しそうだった。

「はい、はい、は～い。無記名で書いた意味ぃ～」

教壇のほうで、大声ではないのに、よく通る声がした。天神くんの声だ。

音々はつねづね思っていたが、学級委員の天神くんは、③いつもまるで歌っているかのように話す。聞き取りやすい発声と、流れるような滑舌。そして、それらを可能にしている、計算され尽くした言葉選び。音々はそれをうらやましいと思ってい

た。

「確かに〜」

「至くんの言うとおりだね」

「ほら、鹿沼ぁ。ビークワイエット！」

クラスの中心グループの女子たちが、口々に天神くんに賛同する。

さきほどまで刺さるように痛かったクラスメートからの視線がどこかにいってしまった。音々は、そろりと頭を上げる。

「誠に申し訳ありませんでしたぁ！」

鹿沼くんが、がたんと勢いよく立って、天神くんに向かって頭を下げた。しかも、額が自分のスネにつきそうなくらい「ペタン」と、二つ折りに。

「ははは っ！　どんな最敬礼だよ！　つか、身体柔(やわ)らかいな、朋希」

天神くんが愉快(ゆかい)そうにツッコミを入れた。それをきっかけにどっと笑いが起こる。

ムードメーカーとは天神くんのような人間のことを言うんだろうな、と音々は思った。空気を変えるどころか、教室ではまるで空気のように存在を消している音々としては、天神くんと同じ空間で、同じ空気を吸っていること自体が不思議に感じられた。

「でも、ほんと、ダントツでこのスローガンが一番だったね」

天神くんは黒板を振(ふ)り返り、「改めて」といった感じでそうつぶやいた。

【奪えない　この青い春　何人も】

音々は改めて【正】の字を数えてみる。全部で六個。音々のクラスは全部で三十四人だから、ほとんどの人間が音々の案に投票したことになる。

「青春」という言葉が持つ魔力のようなものを音々は感じた。思いがけず二年二組のスローガンとなってしまったが、これは、音々の本心でもなんでもない。

「奪われる　青春なんて　持ってない」

本当はそう書きたかった。音々に「青春」なんてキラキラしたものは似合わない。いや、そもそも「青春」のほうが音々なんてお断りだろうと思っていた。こんな、友だちのひとりもいない「ぼっち」の自分なんて。

教室をそっと見回す。鹿沼くんが「令和の土下座スタイル」と叫びながら、変なポーズをとっている。みながそれを見て笑っている。楽しそうだ。こういう何気ない瞬間もきっと「青春の一ページ」になるのだろう。ただ、そのページに音々の名前はない。

音々は、机の上に裏返しで置いておいた次の授業の教科書にちらりと目をやる。氏名の欄に【松尾音々】と、青春とは縁のない人間の名前があった。裏返していた教科書をそっと表にする。

国語の教科書。音々の好きな授業だ。成績だって悪くない。音々の国語の成績は、学年でも上位に入る。クラスなら一番、と言いたいところだが、その上が、というか、学年トップが音々と同じ二年二組にはいた。

「じゃあ、このスローガンを垂れ幕にするんだけど、誰か書いてくれるひと？」

国語の成績学年トップの天神くんがそう言いながら、みなの顔を見回している。

「おまいう？　至」

廊下側の席から男子の声があがる。「おまいう」は「お前が言うな」の略で、自分のことを棚に上げた発言へのツッコミワードだが、いまのはちょっと使い方が違っていた。

④「どう考えたって、至が書いたほうがいいに決まってんじゃん」

教室中のみなが「そうだ、そうだ」とうなずいている。

「おまえ、書道十段なんだろ？」

決して皮肉的なトーンではない。素直に「すげえな」という表情で別の男子が叫ぶ。

「十段もないよ。八段だよ」

天神くんが爽やかに笑いながら返す。「それでも十分すごいって」と、天神ファンの女子が、意味もなく手を「パン！」と叩く。その音をきっかけに、

「じゃあ、至で決定な！」

学級委員でもなんでもない男子が、そう言って拍手をはじめた。すぐにクラス中が手を叩きはじめる。

「え～、そんな簡単に決めちゃっていいの？」

そう言いながらも、この流れは仕方ないなという顔を、天神くんはしていた。

「じゃあ、文字は僕が書くから、それ以外の準備とかは頼んだよ？」

「オッケー！」
大声自慢の鹿沼くんが、クラスメート代表で叫んだ。これで、今日のＬＨＲの議題はすべて終了だ。
キーンコーンカーンコーン
タイミングよく、五限の終わりを告げるチャイムが鳴る。これであとは六限の国語だけ。今日も一日長かったと、音々はふうっとため息をついた。
クラスメートたちが、がたがたと席を立ちはじめる。たった十分の短い休み時間で何ができるというのだろうか。予習でもすればいいのに、と音々は教科書を開こうとした。
「松尾さん。今日の放課後って、空いてる？」
顔を上げると、そこには天神くんがすらっと立っていた。長身だが細身の天神くんは、まさに「すらっ」という擬態語がぴったりだと音々は思った。
どちらかといえば平均以下の身長の音々は、そのコンプレックスもあって、他の女子のように素直に天神くんをかっこいいと思うことができなかった。
「ちょっと、手伝ってほしいことがあるんだけど」
黙っていると、天神くんはそう続けた。
音々は固まってしまう。頭の中に「は？」がいくつも浮かぶ。
国語の成績が学年一位で、学級委員で、しかも人気者の天神くんが私なんかに何を手伝ってほしいというのか、と音々は

パニックになった。

「じゃあ、放課後、教室に残っててね」

音々が何も言えずフリーズしていたら、天神くんが勝手に話を進めていく。どうやら音々の⑤「沈黙」を「イエス」ととったようだ。

物事をなんでもいい方向にとるのは、自分に自信のあるひとの悪い癖だと音々は思った。音々だったら相手が黙っていたら、「否定」か「拒絶」のどちらかだと考える。

しかし、そんな音々の思いは天神くんには伝わらない。「じゃあ、あとでね〜」と、軽やかなステップで自分の席に戻っていった。

その夜、音々は、⑥もやもやしていた。

結局、放課後、教室には残らなかったのだ。学級委員の天神くんが、職員室に日誌を届けに行ったその隙に、すぐさま教室を、そして、学校を脱出した。

晩ごはんを食べ、お風呂に入り、自分の部屋に入って、いまさらながら、天神くんに悪いことをした気持ちになってきた。約束をすっぽかしたことに反省のため息がもれた直後、向こうが勝手に約束したことだ、と思い直す。

申し訳ないことをしたなという思いと、自分は悪くないという思いを行ったり来たり。音々はその無意味な気持ちの往復に、すっかり疲れてしまっていた。

こんなとき、音々は「書く」ことにしていた。小学生のとき、気持ちの整理のためにと勧められた方法が、いまでも続い

ている。気持ちの整理に、頭の整理に、そして、ストレス発散に、「書く」という行為は音々の性格に合っていた。

寝転んでいたベッドから机に移動する。小学校入学時に買ってもらった学習机は、中学生になったいま、音々の身体にちょうどいいサイズになっていた。

椅子に座り、三段目の引き出しから【No.16】と番号が振られたノートを取り出す。⑦イラストも模様もない、シンプルな大学ノート。

さあ、書くぞとシャーペンを握るも、その勢いはすぐにブレーキをかけられた。ノートのページがなくなっていたのだ。

そうだった。本当は今日の帰りに買って帰るつもりだったのだ。なのに、学校から一刻も早く脱出することで頭がいっぱいで、まっすぐ家に帰ってきてしまったのだ。いまのいままで、ノートを買うことなんてすっかり忘れてしまっていた。

それもこれも全部天神くんのせいだ、と音々は思った。

音々は、枕元の目覚まし時計をちらりと見る。短針は【9】を少し通り過ぎたところだった。いつもノートを買っている商店街の文具屋さんはもう閉まっている。

明日にしようかとも思ったが、こんなもやもやした気持ちのままでは眠れる気がしない。パーカーを羽織って家を出る。

（百舌涼一『17シーズン　巡るふたりの五七五』より）

問一　A（35行目）、B（56行目）にあてはまる言葉の組み合わせとして最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア　A　うすうす　B　ふつふつ

イ　A　すごすご　B　たんたん

ウ　A　うずうず　B　ふわふわ

エ　A　こつこつ　B　ざわざわ

オ　A　むくむく　B　ぶすぶす

問二　――線①「春の空の青さと、教室の黒板の緑は、その距離も明るさもあまりに違いすぎて、焦点がすぐに合わない」（8行目）とありますが、ここから音々のどのような様子がわかりますか。最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア　授業中にもかかわらず空を見ていたので、視線を教室内にもどした時に色の違いに目が慣れず、とまどっている様子。

イ　ひとりだけ窓の外をながめていたことがクラスのみんなにわかってしまい、はずかしさで目を合わせることができない様子。

ウ　選ばれないと思い話し合いを聞かずぼんやりとしていたところ、急に自分のスローガンが読まれたので、面食らっている様子。

エ　ぼんやりしていた話し合いの最中に自分の書いたスローガンを読まれ、うれしさのあまり涙で視界がぼやけている様子。

オ　急に窓の外から教室の中へ視線をもどしたため、教室内でどのような話し合いが行われているか理解ができていない様子。

問三　――線②「自分の案が選ばれることなどないと思っていた」（33行目）とありますが、そのように思っていたにもかかわらず、音々が案を提出したのはなぜですか。その理由がわかる一文を探し、最初の5字をぬき出しなさい。

問四　――線③「いつも」（60行目）がかかっている語を本文より抜（ぬ）き出しなさい。

問五　――線④「どう考えたって、至が書いたほうがいいに決まってんじゃん」（98行目）とありますが、廊下側の席の男子がそのように言うのはなぜですか。最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア　至は書道八段のうで前で、クラスの中でスローガンを書く人に最も適していると考えたから。

イ　至は書道八段であるうえ国語の成績も学年トップであり、だれよりも書道に自信があるから。

ウ　書道八段のうで前の至が、スローガンを書く人をクラスで募集したことをいやみに感じたから。

エ　書道八段でも十段でも関係なく、学力が学年トップで優秀（ゆうしゅう）な至に書いてほしいと思ったから。

オ　至は書道が得意なうえに学級委員でもあり、クラスの代表としてスローガンを書くのに適しているから。

問六　――線⑤「音々の『沈黙』」（128行目）とありますが、この「沈黙」は音々のどのような思いを表していますか。40字以内で説明しなさい。

問七　――線⑥「もやもやしていた」（134行目）とありますが、具体的にはどのような気持ちですか。本文より30字でぬき出しなさい。

問八　――線⑦「ノートを取り出す」（145行目）とありますが、この「ノート」は音々にとってどのようなものですか。最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア　「書く」ことを大切にしている音々にとって、毎日の記録や日記として欠かせないもの。

イ　「書く」ことで気持ちの整理ができる音々にとって、16冊も続く、きまりのようなもの。

ウ　「書く」ことを毎日の日課にしている音々にとって、気持ちを落ち着けるために必要なもの。

エ　「書く」ことでストレス発散ができる音々にとって、気持ちや頭の整理ができるもの。

オ　「書く」ことで字の上達を目指す音々にとって、今までの振り返りができる思い出のようなもの。

問九　この後、音々は出かけた先で天神くんにばったり会います。あなたが音々だったら、今日の出来事について天神くんにどのような思いで、なんと声をかけますか。100字以内で書きなさい。